賃並肝煎賃、大阪劔先船の船問屋に口錢を與へて魚梁船との連絡船を設けること、急用の荷物には增船賃を取ることによつて受付順を超え特別扱をなすこと等の如き安村獨特の營業政策は、村方捌の時代となるや凡べて縮少又は全廢されて利用者の尠からぬ不便宜と困却を招いたのである。村方惣百姓は安村氏の稱する所の由緒なるものを根柢から否定して此船の起りは元來百姓共の大和川通船に在るものと主張し、多額の運上を納付せんことをも誓つて屢〻愁訴に及んだが遂に安村の權勢に打克つことは出來なかつた。近世を通じて續けられたこの兩者の激しい相尅の根柢には農村の切實な生活問題と同時に大和川舟運の著しく莫大な利益が潜んで居たものと考へられるのである。（菊版本文四五八頁、大和史學會發行、定價五、〇〇）（稻葉）

○增訂平野集說

官幣大社平野神社編

平野集說は明治十四年、時の平野神社宮司遠藤允信氏が、同社の舊き歷史と耀ける傳統とを顯彰せんとする意圖より、ひろく古今の史料を涉獵して當社關係の記事を輯錄し事項別に類聚集成されたものであつて

第一　創建　　第二　祭神・氏神
第三　神階・社格　　第四　社地・社領
第五　祭儀　　第六　祝詞・宣命
第七　奉幣・祭使・奢進　　第八　行幸・行啓・御幸
第九　社殿・造營・遷宮　　第十　神職・神宮寺
第十一　平松家舊記抄

の諸項に亙つて平野神社史料集とも稱すべきものゝ完成を看たのであつたが、惜しい哉その稿本は長く筐底に祕せられて世に識られることが無かつた。茲に現宮司關目琴季氏は昨年、風害後の社殿の修覆を竣へ正遷宮の御儀を執行はれたのを機として、曩の遠藤氏の業を繼いで本書の刊行を企てられたのである。祭神の問題其他より屢〻學者の注意の對稱となり來つた平野神社の研究に新たなる推進力を與ふるものと言ふべきであらう。

今次の增訂に際して新しく附加せられたものは、同社藏するところの平野社緣起及平野社古文書である。平野社緣起は寛永四年、持命院基定等の筆に成るもので、平安遷都の比平野社が內裏守護のため大和國より勸請されて以來、代々隆昌を重ねた次第を記して神德を頌へたものである。また平野社文書は應永九年の後小松天皇綸旨を始めとして、社殿の造營、社領社務職の安堵に關する足利幕府の御教書、神人社人等の神事興隆、社地保全に關する申狀、社領目錄等室町戰國期のもの約六十通を收めて、能く當代に於ける平野神社の動靜を窺ふに足るものである。（菊版和裝、本文一五五頁、官幣大社平野神社社務所發行、非賣品）（稻葉）

○靜寬院宮御書狀（複製）

下鄕傳平刊

洛北岩倉村なる岩倉公遺蹟保存會の珍藏する孝明天皇皇妹和宮

紹介

――（ウハ封書）――

靜寛院

太夫殿へ　參る

三月十一日　認

明治維新に際しての最大事件の一は、江戸城の引渡であるが、將軍慶喜公は早くも大阪より江戸に還り、東叡山に蟄居して謹愼の意を表すと雖も、是を天聽に達すべき道なく、しかも將軍の意を知らざる者の中には、江戸城を枕に官軍と一戰を交へんとする主戰論者もあつて、德川家の安危すら風前の燈火に似たるものがあつた。其時此際、幕府當局の意の存する所を朝廷に達し、德川の家名を無事に存續し得る力は、一に靜寛院宮に依るの外なかつた。されば慶喜公は內親王に謁して家名存續の事を深く哀願し奉つたので、內親王また深く御心痛あらせられ、上臈の土御門藤子に命じて御內願書を京師に致さしめ給ふと共に、一方、東海道先鋒總督兼鎭撫使として進發中である御母方の近親橋本實梁にも御消息を手交せしめて御一身の進退御處置に就きては決然たる御內意あるを示し給うた。而して京都から歸つた上臈藤子の復命によつて官軍方面の決意は並々ならぬものであつて、事態は容易ならざる危期にある事を察知し給うた內親王は、大總督宮の御軍勢にして江戸入城あらせらるゝに際し、萬一にも江戸止住の浪士などの中に、不敬の徒の出づるあらんか、折角の公武關係は一朝にして瓦壞するの憂目を見るであらうし、もしや不測の變の生ずるあ

親子內親王の御書狀を、近江長濱の下鄕傳平氏が拜讀感激の餘り凡そ原寸大の玻璃版印刷を以て複製頒布せられたものである。先づ、其の御書狀を讀んで見るに、

返々、御征伐御止候樣願候ニては、決して無之候まゝ、あしからす、御聞取の樣、御賴申入存參らせ候、めて度かしこ、

追々春暖催存參らせ候、彌御機嫌よく成らせられ候、めて度忝く存參らせ候、左樣に候へハ、此度ハ誠ニ恐入候事件ニ付、此程驛上京致し、東歸の上委細承り候處、實〳〵恐入候事共ニ候、慶喜事悔悟伏罪東叡山に謹愼罷在候、官軍御進ニ相成候とも、不敬之義、無之樣、嚴しく申付御座候へ共、何分四方の士民輻輳之土地にて候へは、多人數のうちにハ、心得違の物候て、其邊より恭順之意取失候てハ　朝廷へ恐入候已ならす、當家の安危にかゝはり候事と、其邊深々心配致し、鎭撫の事に付、願之義有之、

大總督宮樣府中ニ御滯陣の御樣子故へ、藤事昨日出立致し參らせ候、何卒〳〵、右御返答伺候迄の處、其御手の御軍勢御進ハ、しはし御猶豫の事、ふして〳〵、願存候、右の次第、急使にて　大總督宮樣へ、申入置候まゝ、何卒御着府の處、御猶豫願存參らせ候、双方共下輩のそゝうより、大事を引出し候てハ、實以殘念至極に存參らせ候まゝ、私心中御憐察成下され候、御勘辨の樣、くれ〳〵も御願入參らせ候、委細ハ玉嶋より御聞取の樣と、存參らせ候、いそき大〳〵らん書、よろしく御はんし、御賴申入參らせ候、先ハ早々申入參らせ候　可祝

らば、また收拾すべからざるに至るべきや必せるものがあつた。されば、靜寛院宮は、此の書狀を親しく染筆し給ひて岩倉具定卿の陣所に送り、しばらくの進軍を止めん事を求め給うたもので、御憂慮の程紙面に溢るゝものがある。殊に追書に於て「御征伐御止候樣願候にては決して無之候まゝ、あしからす御聞取の樣」と記され給ふ數行は、洵に至誠の御言葉にして天地爲に感動するものあるを思はしめる。

かくして江戸開城も事無く完了し、平和裡に維新の鴻業を成就し得たりし所以のものは一身を朝幕の間に捧げ、以て和平を圖らしめ給ひし靜寛院宮の御力多きにある事は毫も疑を容れざる所、其の御令德懿行は眞に婦人の鑑として萬代國民の、殊に婦人の、景仰措かざるものあるは喋々を要せざるも、此の御書狀にも、見らるゝが如く、朝幕間の一大事に處しても名分を守り、大義に順ひ、朝威を輝かしめ給ひし御功蹟の亦偉大なるものあるを、吾人は忘れてはならぬ。

本書狀を下鄕氏が感激措く能はずして複製以て諸家に頒ち、靜寛院宮の御德操を新らしく汎く傳へんとされたるは、寔に美擧といふべく、茲に感謝の意を以て、此の紹介の文を執筆する。（非賣品）〔中村〕

○敦煌秘籍留眞　一帙上下兩卷

神田喜一郎編

今より略ぼ三十年前、支那西陲の地、敦煌の千佛洞より夥多しき古寫文獻の發見せられ、之が英京の大英博物館、佛京の佛國々立圖書館に迻藏、世界的寶賣として著名なるは今更喋々を要せず、その總數概算は約一萬二千點と推測せられ、その中佛國にあるものは私も滯佛中に詳細に調査したが、正しく五千五百四十一點あり、第一號より第一九九九號までは梵文の小片が主にして、漢字漢文のもの甚だ尠く、こは何れも硝子板に挾みて藏せられる。第二〇〇〇號以上第五五四一號までは漢字漢文のものが主にして、此の中從來內容目錄も出來て公開閲覽を許されて居るのは第二〇〇〇號より第三五一一號までの一千五百十一點と、第四五〇〇號より第四五二一號までの二十二點と合計一千五百三十三點で、第三五一二號より第四四九九號まで、並に第四五二二號より第五五四一號までの計二千八點は、その將來者ペリオ教授宅に藏せらる若干を除き、私は一覽を爲し得たが、一般には尙ほ公開閲覽を許して居らぬらしい。臺北帝國大學神田喜一郎教授在外研究員として渡佛せらるるや佛國々立圖書館に就きて此等文書を調査せられ、その中の貴重なるものを親しく寫眞に攝られ之を珂羅版に附して一百部の限版とせられ羽田亨博士の題簽を以て錦上に花を加へ以て同好に饋贈せられたるもの實に本書である。今其の內容を一瞥するに主として第二〇〇〇號より第三五一一號までの既公開の部分に屬して居り、一點だけ第四六三四號の永徽令遺文を採錄されてある。

神田教授もその序に謂はる通り、此等古寫本、並に文書にして從來學界に紹介せらるるもの、沙州文錄、敦煌石室碎金、敦煌